

ブレヒトの『コリオレーナス』について

友 永 輝比古

要旨 ブレヒトの『コリオレーナス』はシェイクスピアの同名の戯曲を歴史の弁証法的発展という観点から改作したもので、シェイクスピアはコリオレーナスの悲劇に重点を置いて、悲劇へと一直線に筋を運んでいるのに対して、ブレヒトはローマ国内の発展（民主化）に重点を置いて書き換え、あるいは書き加えをしています。

歴史の弁証法的発展がこの作品によってモデルとして例示されているとしても、ブレヒトは機械論的弁証法を言っているわけではなくて、歴史は確かに弁証法的に発展はしますが、肝心要の一番重要な問題点は民衆の実力ですよ、これなくしては発展はありませんよ、「人間の運命は人間」ですよと、主張しているように思います。

また、社会から相対的に独立した演劇独自の世界という点から見ますと、ブレヒトは過去の戯曲を現代の歴史観で改作吸収することによって、演劇という独自の世界の弁証法的発展を試みたのではないのでしょうか。

1. ブレヒトの『コリオレーナス』は、シェイクスピアの『コリオレーナス』を改作（ただし、未完成）したもので、シェイクスピアのそれはプルターク（46年頃～120年頃）の『英雄伝』の中にある、「ゲーユス（＝ケイアス）マルキウス（＝マーシャス）コリオラーヌス（＝コリオレーナス）」をそのまま利用して戯曲化したものです。

シェイクスピアは、プルタークの『英雄伝』を当時のイギリスの現代劇として書き、その作品は、純粹の悲劇と言うよりは風刺悲劇になっています。ブレヒトは、シェイクスピアで描かれた貴族と平民の対立を基本線にして、これに変更を加えることなく、ブレヒトの歴史観で改作し、20世紀中頃の現代劇にしています。

ところで、芝居の幕開きは、シェイクスピアの場合もブレヒトの場合も、平民の暴動で始まります。シェイクスピアが『コリオレーナス』を書いたのは、1608年とされていますが、この頃イギリスでは各地で暴動が起こっています。また、ブレヒトは1951年から改作に取りかかり、戦争場面を残して、1955年頃に仕上げていますが、その中間の1953年に、東ベルリンの建築労働者が賃上げとノルマの引き下げを要求して暴動を起こしています。いわゆるベルリン暴動で、この時東ベルリンに駐留していたソ連軍が鎮圧に乗り出しています。シェイクスピアはさて置きブレヒトの場合、暴動に対してどんな考えを持っていたのか分かりませんが、シェイクスピアにはない台詞が、暴動を起こしている市民の台詞として、ブレヒトの作品には挿入されています。

ケイアス・マーシャスは武力でくる。

お前たちは逃げるのか、それとも戦うのか、どっちだ。

気になる台詞ですが、暴動と作品の直接的関係に深入りしても無駄で、作品全体を通して、

ブレヒトと東独の関係を推測する方が、まだしも意味があるように思います。ただ、ブレヒトは、暴動のあった年には改作の仕事を中断しています。

2. あらすじ 穀物、オリーブ等の物価高と飢えに苦しむローマの貧乏平民が、穀物、オリーブの値段を自分たちに決めさせろ、と暴動を起します。ローマの内紛をチャンスと見て、敵国アンシャムのヴォルサイ人がローマに戦争を仕掛けます。貴族はこれに対処するために、マーシャスによる暴動の武力鎮圧をあきらめ、平民の代表を護民官にして平民の政治参加を認めるという妥協策を取り、国内統一を図ります。一方、護民官に選ばれたブルータスとシーニアスは民衆に向かって、マーシャスの軍隊に加わってヴォルサイ人と戦うように、と指示します。

マーシャスは戦争に勝ち、占領した町の名前コリオライにちなんで「コリオレーナス」という称号を得ます。マーシャスはローマに凱旋し、元老院に功績が認められ、執政官の候補者として押されることとなります。候補者は慣習に従って、町に出て平民に戦場で受けた傷を見せ、彼らの推薦を取り付けることになっていますが、コリオレーナスは、戦場で果敢に戦う勇気を唯一の徳とし、平民を常日頃勇気を持ちあわせていない愚民と見なしていたこともあって、平民に媚びへつらって投票を依頼することを最初は拒否しますが、しぶしぶ選挙運動をします。平民たちは、マーシャスは傲慢にしてかつ横柄で、外敵を懲らしめることもやれば内なる平民にも警棒を振り下ろし、彼には民衆を愛する気持ちがない、というそのことを難点としつつも、彼をかけがえのない人物と認めて、コリオレーナスが執政官になり政権を握ることに対して賛意を表明します。

マーシャスと元老官たちは一安心し、あとは認証式のみとなった、その段階で、護民官のシーニアス（ブルータスと比べると少し攻撃的性格が強い）が、対ヴォルサイ人戦争の最中に平民が獲得した新しい権利、認証式前に執政官候補者にその政治政策を問う権利を行使します。アンシャムから奪った戦利品をどうするのか、どこにあるのか、という疑惑を追求する予期せぬ質問に、マーシャスは狼狽し、民衆を口汚く罵倒します。そして、元老官の制止も聞かずに、ついに

これは二重支配だ。一方は
故あって見下し、他方は
理由もなく誹謗している。権力と分別を持つ貴族は
偉大なる無分別の
イエスかノーの返事がなければ、何もできないのか。

ローマに外敵なしとなった今
それも俺のおかげだが、ローマはライ病を
笑いながら洗い落とせるんだぞ。

と、独裁制志向を剥き出しにした発言をします。ブルータスは警保官にマーシャス逮捕を命じ、シーニアスは彼の死刑を群衆に呼びかけます。マーシャスは剣を取り、あわや貴族と群衆の間で乱闘騒ぎになりかけますが、貴族たちがマーシャスを連れ去って、その場は終わります。

彼に弁明の機会が与えられ、裁判が開かれます。罪状は護民官を失脚させ、専制的権力を握

ろうとしたこと、つまり国民を裏切ろうとしたことです。裏切り者呼ばわりされたマーシャスは、母親のヴォラームニャと元老官の「おだやかになるように」との忠告も忘れ、怒りに任せて、護民官と平民に罵声を浴びせます。そのことによって永久追放の判決が下されます。

コリオレーナスは復讐心に燃え、敵国アンシャムの武将オフィーディアスと手を結びます。ヴォルサイ人の軍を率いたコリオレーナスは、勝ち戦を続けながら、ローマの目前にまで迫ります。彼は早くもヴォルサイ人から軍神のように崇められ、そのことを快く思わなかったオフィーディアスは、コリオレーナスがローマを取ったときに彼を陥れる陰謀を企てます。そんな謀があることも全く知らず、コリオレーナスは、かつての上官コミーニウスが彼にローマへの帰還を訴えても、次に親友のメニーニウスがローマ救済を願い出ても聞き入れず、ローマの降伏を待ちます。

コミーニウスとメニーニウスの説得工作が失敗し、ローマは最大の危機を迎えることになり、貴族たちはローマから逃げ出します。護民官のブルータスとシシーニウスをはじめ平民の大多数は防衛戦争を決意し、コミーニウスは他の一部の貴族とともにそれに加わり、従軍する平民のために武器の調達を約束します。そこへヴォラームニャからの、コリオレーナスの妻と子どもを連れてコリオレーナスを説得しに行きたいとの、許可願いが出ます。ブルータスは、彼女の願いはローマの平民がヴォルサイ人によってではなく、ローマ人によって支配されることを望んでいる貴族的愛国精神からのものであることを、見抜いています。彼はヴォラームニャの申請を許可しますが、その意図は、彼女がローマに吉報をもたらすことへの期待ではなくて、武装準備のための時間稼ぎです。ブルータスは、自分たちのローマについて自信を持ってこう語ります。

私にとって、かつ聞けば、みんなにとってこのローマは
壁内を歩くあいつの姿がなくなってから
守るに値する良き町となった。これは
おそらく、建国以来、はじめてのことである。

ローマが降伏の狼煙を上げるのを待っているコリオレーナスの前に、その妻と子どもを従えて、ヴォラームニャが現れます。彼女は息子にどう行動すべきかは語らずに、母親としての苦しい立場を語り嘆きます。ローマが勝てば、息子は裏切り者として町中を引きずりまわされ、息子が勝てば、ローマは瓦礫の山と化してしまう、と。そして最後に戦争の結果について、貴族の一員として次のように述べて、ヴォラームニャはコリオレーナスと決別します。

お前が攻め入ろうとしているローマは
お前が立ち去ったときのローマとは違います。
お前はもはやかけがえのない人物でもなんでもありません。
すべてのローマ人の仇敵でしかないのです。
降伏の狼煙が上がるのを待ってもむだ。
煙が見えたとしたら、それは
祖国を踏みにじり、敵国に隷属した
お前を討つための剣を鍛えている

鍛冶屋の煙。私たち
ローマの光輝なる貴族は
ヴォルサイ人からの解放を
平民どもに礼を言うか、もしくは
平民からの解放を
ヴォルサイ人に礼を言わねばなりません。行きましょう、
この男はヴォルサイ人を母に持ち、
その妻はコリオライに住み、この子は
偶然この男に似ているだけのこと。

軍を引き、アンシャムに戻ったコリオレーナスは、まんまとオフィーディアスの術中にはま
ります。オフィーディアスは、母親に説得されて軍を撤退させ、目前にした勝利をみすみす手
放したコリオレーナスのことを、「裏切り者」、「甘ったれ小僧」と罵ります。挑発に乗り怒っ
たコリオレーナスは、こともあろうにヴォルサイ人を前にして、ローマ人とヴォルサイ人が戦
争をしたときに、自分がいかに果敢に戦ってヴォルサイ人を屈服させたか、と声高に自慢しま
す。ヴォルサイ人は不快感と怒りを覚え、オフィーディアスの部下はコリオレーナスを殺害し
ます。

終景のローマでは元老官、執政官と護民官たちからなる会議が開かれていて、たんと政
務が進められています。その席上、マーシャス家から出されている、コリオレーナスのために
10か月の公式の喪中期間を設ける願い出が、元老官から議題として提出されます。護民官の
ブルータスは、即座に「却下！」と撥ね付けます。

3. このように筋を見てくると、ブレヒトは舞台の上で社会あるいは歴史の弁証法的発展のイ
ロハを例示しようとした、というふうに思えます。矛盾・対立から統一へ、そして統一から矛
盾・対立への線が繰り返される中で、かけがえのない偉大な人物は否定され、平民は自由と権
利を拡大して行く、そんな様子が描かれているからです。

まず芝居は貴族と平民の対立で始まります。外敵が現れることによって、両者は統一します。
この段階で平民は、その代表である護民官を国政に送る権利を得ます。しかし、この統一はま
だ矛盾を内包したままです。ローマと外敵との矛盾・対立という状況下で、平民は民主化を一
歩進め、執政官候補者は国民に政治政策を述べなければならない、という新たな制度を設けま
す。

外敵との対立が解決すると、前よりも厳しい矛盾・対立が起こります。独裁政治を企図する
コリオレーナスとそれを阻止しようとする護民官および平民との対立です。この対立は、コリ
オレーナスの追放で解決されます。この段階では、平民の力は以前より強くなっています。

ローマの町が一応安定すると、コリオレーナスが組する外敵との間に再び対立が起きます。
この対立は、貴族と平民の統一した力との直接対決によってではなくて、ヴォラームニャの個
人的行動によって間接的に解決されます。外敵との対立、貴族と平民の統一という点では、最
初の段階とこの2度目の段階では同じです。しかし、前はコリオレーナスを必要とし、貴族は
一枚岩でしたが、後の方はコリオレーナスのようなかけがえのない人物を必要としておらず、
貴族はローマから逃げる者と防衛戦争に参加する者とに分裂しています。ローマ国内での貴族

と平民の矛盾・対立という点から見ると、貴族の力は弱まり、平民はさらに実力をつけ、民主化を更に一步前進させています。それはこの芝居の最後の景、会議の場での護民官の発言力の強さによって表現されています。

4. ブレヒトは、この芝居で歴史の弁証法的発展を例示したとしても、機械論的弁証法を示したわけではありません。英雄の傲慢、外敵、全くの個人的行為、対立する相手の分裂等の言わば偶然的要素が引き起こすそれぞれの状況下での、民衆の主体的の意志と行動が示されています。つまり、ブレヒトにとって歴史の弁証法的発展は、人間の問題であり、今人間が置かれている状況を少しでも良い状況に変えたい、と思う人間の意志と行動が、しかも一つにまとまった人々の意思と行動が、史的弁証法の肝心要のイロハのイの部分なのです。

第1幕第一景の暴動場面では、平民たちの中で、自分たちの要求が元老院によって認められるまで、徹底的に行動することの、意志確認が行われています。また第2幕第3景でコリオレーナスが選挙運動をする場面では、投票を依頼されれば、それを拒む力を持っている平民の一人に、ブレヒトはこう語らせています。

むろん俺たちには、そうする（断る）力はある。けどな
その力を使う、ひとつの力ってものがないんだ。

ブレヒトの『コリオレーナス』はこのひとつの力、民衆の実力が歴史を造ること、彼がよく言う「人間の運命は人間」を描いた芝居です。

5. さて、シェイクスピアの『コリオレーナス』とブレヒトのそれとの比較ですが、まずコリオレーナスの性格。これについてはプルタークに「かねがね心の中でも怒りっぽい争い好きな部分を偉大で高貴なものとしてはたらかせ、政治家の徳性に最も適っている重々しさと温和さを理性と教養によって調合して置くことをせず、国家の政務に與かるものは、……我儘をできるだけ避けて人々と交わり、或る人々が手ひどく嘲笑している不正に対する甘受を好むようにならなければならないということを知らなかった。いつも生一本で頑固に通し、あらゆる点であらゆる人に打ち勝ち屈服させることが、勇気の行い……と考え」（河野與一訳）とあります。

シェイクスピアのコリオレーナス像は全くこの通りで、ブレヒトでもそうです。コリオレーナスは勇気を唯一の徳とし、軍人としてはかけがえのない人物であるが、彼にとっては政治も戦争と同じで、平民と妥協する政策は貴族政治を破壊し、国を滅ぼすとの信念から、平民の自由と権利を奪う方が得策であると考えています。また、戦場以外での場面では、理性的な状況判断ができない人物です。

6. 暴動そして統一。貴族と平民の妥協策としてブルータスとシシーニウスが護民官に選ばれ、「ローマの町が一つになると直ぐ民衆は武器を取り、コンスルたちの命に服して快く戦争に向かった。」とプルタークにはあって、ブレヒトはここを利用して、マーシャスに呼応して、プルタークに積極的な戦争参加を平民に呼びかけさせています。

諸君、彼（マーシャス）についていきなさい！名簿に名前を書くように！
壁内での、穀物、オリーブ、賃貸料および利子の免除を勝ち取る戦いは、
諸君がローマのために戦っている間、私たちがやる。

ブレヒトは、ブルータスとシシーニアスを単なる民衆煽動家ではなく、民衆の指導者として描いています。シェイクスピアではそんな場面はなく、平民はこそこそ逃げ出しているし、ブルータスとシシーニアスは舞台上に二人だけ残り、マーシャスの悪口を言っています。

7. 投票依頼の場面。執政官候補者となったコリオレーナスは、プルタークでは町を歩き、数々の戦争で受けた傷痕を見せたので、平民は彼に投票する気になったが、投票日になって、元老官たちを従えた彼の姿を見て、不快感を覚え、さらに自由が奪われるのではないかと思い、あっさりとして彼を落選させたと、なっています。

シェイクスピアとブレヒトでは、平民に媚びへつらうことを嫌う彼の性格を一貫させるために、傷を見せずに賛成票を得させています。明確な落選場面を入れなかったのは、劇的の進行を続ける必要からかも知れません。

8. 認証式を阻止しようとする民衆と貴族の間で乱闘騒ぎが起きる場面。プルタークには、コリオレーナスは落選していますので、民衆が認証式を阻止するために騒動を起した、という記述はありません。コリオレーナスの落選が決まってから云々とあって、こうしている間に、穀物配分問題で無料配布を要求する民衆が、この要求を飲むことに猛烈に反対するコリオレーナスの議会での強権的、独裁制的発言に怒り、それで騒動が起り、護民官がコリオレーナスを告発し、自分で弁明することを求めた、とあります。護民官は、弁明の場でコリオレーナスに、「国政の崩壊と民衆の壊滅を目当てに元老院を駆りたてたこと」等を認めるかどうかを云わせようとしたが、コリオレーナスは「押しつけがましいあけすけな言葉やあけすけ以上の非難を放ったばかりでなく、声の調子も顔付きも傍若無人な軽蔑に近い平気な態度を示した」ので、民衆は激怒し、シシーニアスは彼の死刑を宣告します。これがきっかけとなって貴族と民衆の間で乱闘騒ぎが起きかけます。貴族側の説得で、暴力を以って処刑せずに、合法的に民会にかけて投票で決めよう、ということでその場は収まります。

シェイクスピアが民衆による認証式阻止の場面を思いついたのは、プルタークにあるような、落選からそうこうする間に穀物問題があってコリオレーナスの発言で騒動が起こる、という線では落選で一旦筋が途切れるので、舞台での貴族と民衆の緊張した対立関係が続けて行くための作劇上の処置ではなかったかと思います。そこでシェイクスピアは護民官に民衆を扇動させ、意図的に騒動を起こさせています。プルタークとシシーニアスは、民衆にコリオレーナスが絶対的権力を握ったとき民衆はどうなるかを説き、認証はまだだから今なら拒否できる、選挙を撤回するようにと煽り、民衆の騒動を準備します。後の筋の展開は、プルタークに従っていますが、シェイクスピアはここで平民出身の護民官ブルータスとシシーニアスの立ち回りの上手さを次の台詞で示しています。

ブルータス 思うようにやらせよう。

いちかばちか、今のうちに一騒動おこさせたほうがいい。

ほうっておくと、もっとひどいことになる。

彼らが拒否すると、

やつはあの性質だ、きっと怒りだす、

ゆっくりそれを眺めて、策をねろう。

シシーニアス では、議事堂（認証式の間）へ。

民衆がおしかけて来ないうちに行きましょう。

そうすれば、半分はわれわれがけしかけてやらせたのだが、

全部連中がしたことのようにみえる。（小田島雄志訳）

他人に何事かをやらせておいて、自分には何の責任もないという顔をして、しかも民衆の代表者の顔をする、という民衆指導者像はシェイクスピアのもので、プルタークにはこの種の、つまり自己保存本能を露呈するような記述は全く見当たりません。シェイクスピアの時代ならともかく、ブレヒト後の現代では「そ知らぬ顔をする」ことへの了解が護民官と平民の間にあるでしょう。

ブレヒトの場合、認証式阻止から死刑宣言そして乱闘騒ぎまで、シェイクスピアを踏襲していますが、唯一違う点は、シェイクスピアが護民官をして民衆に認証式阻止のための騒動、言わば民衆の実力行使を準備させたのに対して、ブレヒトは、シシーニアスに合法的手段をとらせています。つまり、ブレヒト自身が発想した制度、執政官候補者は認証式前にその政治政策を民衆に述べなければならない、という民主的手続き制度の行使をシシーニアスは主張し、コリオレーナスがアンシャムからの戦利品（プルタークにはあるが、シェイクスピアにはない）をどうするのか、どこにあるのかと疑惑を追及します。この点において、シェイクスピアとブレヒトの間の歴史の相違を感じます。ブレヒトにとっては、恐らく、民衆の実力行使だけではなくて、民主的制度の確立とその行使が、歴史の弁証法的発展のイロハに属する重要な部分であったのでしょう。

9. コリオレーナス裁判の場面。プルタークでは、護民官は独裁制の罪状は立証することができないので、これをやめにして、コリオレーナスが市場の物価が安くなることを妨げ、護民官の職を民衆の手から奪おうとしたこと、アンシャムからの戦利品を国庫に収めなかったことを罪状とし、戦利品の告発はコリオレーナスを狼狽させ、彼は納得のいく説明を行うことができず、投票の結果、彼は追放処分になった、とあります。

シェイクスピアでは、アンシャムからの戦利品に関するスキャンダル問題には触れず、民衆から政治参加の権利を奪い、独裁者たらんとしたこと、この一点で、彼の追放処分が決まります。

ブレヒトの場合、プルタークにある経済的スキャンダルを理由にしてではなくて、シェイクスピアにある通りに、民主政治を破壊し、独裁者たらんとした政治犯として、コリオレーナスを追放処分にしていきます。シェイクスピアとブレヒトが同じ追放場面を描いたとしても、ファシズムを体験し、個人崇拜の強い社会主義国に住んでいたブレヒトと中世の人シェイクスピアの間では、独裁者追放のイメージは違っていたらうと思います。

10. 母親ヴォラームニャによるコリオレーナス説得の場面。プルタークでは、ヴォラームニャは自分の意志でコリオレーナスに会いに行きます。そこで母親としての胸のうちの苦しみを切々

と訴え、ヴォルサイ人とローマ人の両方が満足する道を選ぶようにと、息子を説得します。

シェイクスピアでは、コミーニウス、ブルータスとシーニウスらが相談して、最後の頼みの綱であるヴォラームニャをローマの使者としてコリオレーナスのところへ派遣します。説得内容はほとんどプルタークと同じです。

ブレヒトでは、既に見たように、ブルータスはヴォラームニャが適地へ行くことを防衛戦争準備の時間稼ぎとして許可します。説得内容は、シェイクスピアと同様に、母と子の関係での心の苦しきは述べていますが、両方にとって「平和の恩人」のくぐりだけはカットされています。ブレヒトは、既述の引用文（ブレヒトのオリジナル）にあるように、階級的観点からヴォラームニャに、どちらが勝つにしても、ローマの貴族にとっては悪い結果になると、語らせています。

シェイクスピアの場合、劇の筋を一直線に悲劇へ向かわせるために、ローマが戦争に備えるシーンは全くありませんし、ローマの町内部の発展は描かれておりません。またそういう発想は生まれなかったのかも知れません。ブレヒトの場合、歴史の弁証法的発展を例示するために、英雄を必要としたローマ（過去）と英雄を必要としなくなったローマ（現在）が示されています。

11. 終景。プルタークでは、方々の町から人々が集まって、コリオレーナスの立派な葬儀を行い、ローマでは10か月喪に服することが認められたと、あります。

シェイクスピアでは、オフィーディアスは暗殺されたコリオレーナスを足で踏みつけておいてから、手厚い葬儀を命じています。喪に服することについては、何も書かれていません。

ブレヒトでは、シェイクスピアにはない議会の場が描かれており、ローマが占領したコリオライをヴォルサイ人に返還すること等が決定され、最後の案件、10か月の喪はブルータスによって否決されています（英雄崇拜時代の終焉）。

12. シェイクスピアとブレヒトの相違点を上のように見てきますと、ブレヒトがシェイクスピアを改作した意図は、人間社会の史的弁証法的発展の例示だけでなく、他にもあったように思われます。それは、社会から相対的に独立した演劇という独自の世界の弁証法的発展を自分の作品によって示すこと、ではなかったでしょうか。もしそうであったとしたら、ファシズムによって演劇が破壊されたドイツにおいて演劇の復興は一つの課題であったことを考慮すると、ブレヒトは社会主義文化高揚政策には乗っからずに、それとは一線を画しながら、東西両ドイツを視野に入れて、過去の作品の現代的吸収による演劇復興を考えていたのではないのでしょうか。

13. ブレヒトのこの作品は、弁証法的思考訓練には良い作品です。ただ、ものの観方を学ぶというか、状況によって人間がどのように行動すべきかを学ぶことを楽しみとする場合には、そう言えるというだけのことです。良いからといって、上演用に向いているとは言えません。今の日本は、それがどんなものであるにしる組織嫌いの人々が増え、対立は表面から消え、人々は芝居を観るにしても、気楽に楽しめ、しかも個人として生きていく上で元気のもらえる芝居、そんな芝居が求められています。このような状況下では、この作品は観客には気分的に受け入れられないでしょう。

参考文献

Bertolt Brecht, "Coriolan", in Bertolt Brecht Gesammelte Werke Bd. III. (Gesammelte Werke in 8 Bänden.) (Frankfurt am Main:Suhrkamp Verlag. 1967)

Jan Knopf, "BRECHT HANDBUCH Theater" (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart. 1986)

プルターク著, 河野與一訳『プルターク英雄伝』第3巻 (岩波書店. 1964) * 『英雄伝』からの引用文では旧漢字、旧仮名遣いを今様に変えたところもある。

シェイクスピア著, 福田恆在訳『コリオレイナス』, シェイクスピア全集補 (新潮社. 1971)

シェイクスピア著, 小田島雄志訳『コリオレーナス』, シェイクスピア全集Ⅲ (白水社. 1977)

岩淵達治著, 『プレヒト』 (紀伊國屋新書. 1966)